Nightmare freaks tales

MEAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ　ｆｒｅａｋｓ　ｔａｌｅｓ

【Ｎコード】

Ｎ７２０３Ｚ

【作者名】

ＭＥＡＮ

【あらすじ】

今ではない、ここでもない

どこか昔の世界のお話

人間ではない７種類の化け物（フリーク）の物語

その話は砂糖の様に甘く、時には子供の様に残酷です。

さて、今日は誰の物語でしょうか…

1（前書き）

昔、あるところに血の吸えない吸血鬼がいました

彼の名前はダナ

今回はその少し変わった吸血鬼のお話です

1

僕は人気のない静かな夜の城下町を歩いていました。
夜空は星が瞬いていて三日月も幻想的な冷たい光を放っているとても綺麗な夜です。
僕はたまに、本当にたまにこうした空が綺麗で静かな夜の城下町を歩き、あるところに向かいます。

「こんばんわ」

背後から高く、そして色っぽい声が聞こえます。
その声の質からすぐに娼婦だとわかりました。
こうした静かな夜を歩いていると、たまに娼婦に話しかけられるのです。
僕は振り返らずに、ただただ下のレンガを見つめて歩き続けました。

「貴女よ、そこの貴族さん」

彼女は僕の事を貴族と思っているようです。
それもそのはず、僕の格好は紳士のようにハット帽をかぶり、黒いマントを靡かせていますから貴族の様に見えるのです。

「んもう！！レディーを無視する気？」

「いえ、そんなつもりじゃないんです…」

無視、という言葉にお人よしの僕は足を止めてしまいました。
彼女は走ってきたのか、少し荒い息遣いが必要以上に身近に感じます。
そんな身近にいる彼女にドキドキしてしまい嫌な汗がじんわりと出てきました。
ドキドキと言うのは恋とかそういうものじゃなくて、こう、悪い事をしをして、それがバレてドキドキするみたいな嫌なドキドキです。

「あ、こーいうの初めてなのね！大丈夫よ、照れなくても。って言っても最初はみんな照れるんだけどね」

そう言って彼女は僕の後ろから腕を回して、何かねだる様に服を優しく引っ張りました。

「だからちょーっとあそこの酒場で飲まな…」

後ろから器用に僕の目の前に出てきた彼女は、僕というものを認識すると一瞬にして顔を固めました。
誘惑するように上目遣いをする瞳は大きく見開き、にっこりとほほ笑んでいた口はぽかんと開いています。
無理もありません、目の下には青黒い気味の悪いクマ、肌は死んだ人のように青白く唇もまた青白い僕をみたんだから。

「ヒィッ！！」

彼女の小さい悲鳴が静かな夜の城下町に響きました。
彼女はすぐに掴んだ服からすぐに手を離し、一歩二歩と後ろに後退ったあとあまりにも驚きすぎて地面にヘナヘナと座り込んでしまいました。

「だ、大丈夫ですか！？」

「触らないで！！」

慌てて助けを差し伸べた手は虚しく弾かれてしまいました。
ヒリヒリと痛む手、だけど人間みたいに赤くはならない。
彼女は少し汚れたクリーム色のドレスをたくしあげると、一心不乱に駆けだしてゆきました

「気味悪い化け物（フリーク）め！！　」

そう叫ぶと、彼女は闇夜に消えて見えなくなってしまいました。
ぽかんと目を見開いて眺めていた僕の顔はみるみると悲しい表情になりました。
何回も同じ目にあっているけれど、この取り残された痛みは未だに慣れません。
これが吸血鬼、化け物（フリーク）である僕の定め。

何もしなくても罵倒され、逃げられ、偏見される。
僕が努力したところで何も変わらない、こう考えるとますます悲しくなりました。
自然と漏れる溜息に肩を落としてまたレンガを見つめて歩こうとすると、僕の目の前には綺麗な花がありました。
花びらの一枚一枚が純白で傷一つない凛とした花です。
でも、どうしてこんな綺麗な花がこんな僕の目の前に？
首を左右に振っても、人は誰ひとり見当たりません。

「こっちよ」

可愛らしい声は後ろからでも上からでもなく、下から聞こえてきました。
声がする方へと目を向けるとそこには小さな女の子がにっこりとほほ笑んでいました。

「うわぁっ！！」

驚いた僕はとっさに引いた上半身に足が付いてけず、尻もちをついてしまいました。
まさか、小さな子供がこんな夜遅くにいるとは思わなかったんです。
後からじんじんと腰とお尻に鈍い痛みが走ります。

「大丈夫？」

「僕なら平気だよ」

あまりにも心配そうに見てくるものだから、僕は慌ててそう答えてしまいました。
だけど実際は、腰を擦っても痛みなど引く気配などありません。

「ならよかった！」

僕の言葉を信じた女の子はにっこりと微笑みました。
この気味悪い僕に、笑った…
悲鳴を上げたり、顔を歪ませたりしたんじゃない…笑ったんだ。
人間の純粋な笑顔を見たのは何年ぶりだろうか、もしかしたら初めてかもしれない。

「あのねあのね、わたし綺麗なお花を見つけたのよ。だからあなたにあげる！」

そう言って女の子は元気いっぱいに、純白な名も知らない花を僕の目の前に差し出します。
だけど、精一杯背伸びをするその細い足は泥だらけです。
まだ秋とはいえ、冷えきっている夜なのに靴も履いていません。
さらによく見ると洋服もツギハギで泥だらけでした。
物乞い…僕はそう思いました。
まだこんなに小さいのに、しかもこんなに夜遅くに
この子に親はいるのだろうか？いるとしたら、こうして女の子を寒

い夜まで物乞いをさせているのか
こんな気味悪い僕なんかに物乞いをして…怖いだろうに
そう考えると申し訳ない気持ちで一杯になり、胸に変な靄が掛かり始めました。

「そのお花はいくらだい？」

「いくら？」

「ああ、そうさ。怖い思いをさせてごめんよ。その花は倍の値段で買うよ。」

怖い思いをさせてしまっている僕に、唯一できる罪滅ぼしでした。
運よく私にはお金が沢山あります。
といってもこれは僕が住んでいるお屋敷にあったものですが…
幽霊屋敷と言われて避けられていた屋敷に僕は住んでいます。
そこには元々地位が高い人が住んでいたのか、沢山のお金がありました。
なのでこの城下町に住んでいる人達のようにお金に困ることはありませんでした。

「お金なんていらないよ」

「じゃあ、どうして…」

「だって貴族さん、凄く悲しそうな顔をしていたんですもの。これあげたら喜ぶかなって思って」

「え？」

「だからこれあげる！！」

そう言って彼女は僕の手を引いてポンっと花を置くと優しく手を包み込んで半ば強引に花を握らせませた。
彼女の手の温かさがじんわりと肌に伝わります。

「ばいばい」

そう言って手を振ると女の子は何か嬉しそうにスキップをして闇夜に消えて行きました。
手を広げて取り残された花を見ると自然と笑みがこぼれました。
今まで何百回の、何千回の夜を歩いてきたけれどこんな嬉しい事は初めてです。
僕は胸のポケットにそっとそれを入れて夜の街を、今度はちゃんと前を向いて歩き始めました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7203z/

Nightmare freaks tales

2011年12月23日23時50分発行